



発行 社団法人 日本品質管理学会
 東京都杉並区高円寺南1-2-1 (財)日本科学技術連盟東高円寺ビル内
 電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507
 ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス 食の安全・安心は「品質管理の実践」から
- 2-私の提言 品質管理の存在感向上
- 2-ルポルターージュ 第102回中部講演会ルポ
- 3-第320回関西事業所見学会ルポ/第325回本部事業所見学会ルポ/6月の入会者紹介
- 4-7月の入会者紹介/行事案内/会費請求/総会告知

食の安全・安心は「品質管理の実践」から

食品安全ネットワーク 会長 米虫 節夫

2007年1月に起こった不二家の事件に引き続き、ミートホープ社事件や中国産製品の安全問題など、食品分野の品質管理に関係する事件が続いている。これらの事件に対して色々の論評がされているが、いずれも「トップの姿勢が悪い」「品質管理がなっていない」「ISO9001の認証をとっているのにプロセス管理がなっていない」などの批判ばかりの後ろ向きの「論」ばかりである。ここでは、「ではどうすればよいか」を不二家事件を例に紹介したい。

不二家事件の発端

不二家事件の発端は、「消費期限切れ」の原材料を用いていたという内部告発から始まった。食品分野で食の安全・安心、食品衛生などに関連した仕事をしている者にとっては、1日2日の消費期限切れの原材料使用は食の安全上それほど大きな問題とは考えられず、もっと大きな問題が隠されていると考えた。案の定、その後の新聞報道などによると、不二家はトップの姿勢をはじめ数多くの問題を抱えていた。

新聞報道では2007年1月31日にSGSにより次のような是正事項が提出されたとされている。品質管理の基本が出来ていなかったと見るべきだろう。

- 管理責任者の権限が不明確、従業員と意思疎通が図られていない
- 不良品が適切に処理されていない

- 品質マニュアルを含む文書管理、記録に不備がある
- 従業員教育が不十分
- 取引先に選定基準が曖昧
- 製造工程の検査態勢が不適切
- 内部監査が徹底されていない

不二家事件を知って何をすべきか

この事例を他山の石として、とらねばならない行動を考えると、企業内における立場・役職により異なってくる。例えば、企業の代表権を持つトップ・経営者や重役会のメンバー、トップ・経営者の指示により企業活動の一部分を統括する執行役員、中間管理職、現場の主任や職長などといったライン・地位によりとるべき行動に大きな差が存在する。

一方、製品品質全般に責任を持つ品質保証担当者、品質管理(検査・試験)担当者、原材料の購入や保管を担当する購買・保管・物流担当者、商品生産を担当する製造担当者、設備・機械などの保守・点検などを担当する生産設備や技術担当者、顧客と直接対応する営業担当者、新製品などの開発担当者など企業活動の機能別に見ても、それぞれの部署で行うべき行動は異なってくるだろう。

トップ・経営者はどんなことを行わなければならないか?

ここでは、例としてトップ・経営者がこの事件を契機に何をなすべきか考

えてみよう。

ISO22000では、「経営者のコミットメント」という要求事項が、さらに、「緊急事態に対する備え及び対応」において、トップマネジメントが何をなすべきかが記載されている。経営者・トップマネジメントは、品質方針・食品安全方針を設定し、具体的にそれらに対してコミットメントしていることを示さなければならない。不二家の事件は、このようなコミットメントの証拠を残すには格好の事件と捉えねばならない。

このように考えると、トップ・経営者はこの事件を契機に食品安全に関連した行動をとるべきである。行うことは次の2つである。

- 1) 全従業員並びに利害関係者に自社が食品安全の確保に努め、法令・規制要求事項に適合した(complianceのある)行動を今後共にとるということを内容とする食品安全宣言を公表すること。
- 2) 出来るだけ早い時期にマネジメントレビューを行うことを予告し、それに向けた全社点検活動をするようにという指示を出すこと。

JSQC会員の皆さんは、このトップ・経営者の例を元に、一つの事件が起こったときに、各階層、各機能の立場で何をすべきかをぜひ考えてほしいものだ。それにより更なるTQMの発展が図られることであろう。

● 私 の 提 言 ●

品質管理の存在感向上

元・コニカ(株) 山崎 正彦



TQM 奨励賞はISO9001の認証を取得し、TQMのレベルアップを計るために、日本科学技術連盟が

2000年に創設した賞で昨年度までに22社が受賞している。受賞会社の中には受賞後もTQMを継続的に推進してデミング賞を受賞した会社もあるが、逆に受賞後に停滞している企業も見かける。なぜだろうか？受賞後にTQM活動を継続している企業には、①オーナー社長の企業、②親会社の指導、③QCコンサルタントの長期指導、などいくつかの共通点が見出せる。即ち、TQM奨励賞を受賞した後も継続させ

ていく仕組みが備っているのである。

企業経営では、財務諸表の作成とその開示が法律で決められ、違反者は処罰を受ける。これ程の強制力はないが、ISO9001でも認証取得後のフォローアップとしての第三者評価が実施され、不適合企業は認定取り消しなどの処置が講じられる。企業の中にTQMを継続的に定着させるにはどのような方法があるか。法規制は現実的でないので、その他の方向を

1) 経営トップの協力を仰ぐ

数年前に品質管理の分野でCQO (Chief Quality Officer) を企業に置く働きかけをする議論があった。品質管理を専門に担当する役員の任命である。一部の企業では実施されたようだが、ほんの数例に過ぎず、その

議論も消えてしまっている。TQMを経営の質向上というならば、経営の中での存在感を高めていく必要がある。最近、品質問題により企業が破綻をきたす事例や多くの企業でCSRの高まり傾向が見られ、今が、品質管理についてトップの理解を得る絶好のチャンスと感じている。

2) TQM定着ツールの開発

TQMを継続させるツールとして「方針管理」がある。経営理念、長期計画、年度計画、実施、フォローアップ、次期課題といった繋がりの中で近年、戦略が加わったが、冒頭に述べたように、経営者が変わると推進の勢いが弱まり更なるツールが必要と考える。経営者が後任を選ぶ際の要件の中に品質管理の継続が盛り込まれる仕組みが開発できないものだろうか。

企業から「品質管理部」が減り、大学から「経営工学部」がなくなっていく現実をみて、なんとか品質管理の存在感の向上について、力添えができれば良いと考えている。

第102回中部
講演会
ルポ「品質工学のすすめ
—その2—」

2007年7月9日(月)第102回(中部支部48回)講演会が愛知県刈谷市の刈谷市産業振興センターにて『品質工学のすすめ—その2—』を大会テーマとして開催された。193名が参加し、下記内容の講演が盛況に行なわれ、過去にない参加数であった。

■講演1 「欧米・韓国におけるDFSSと品質工学の展開」

ASI Consulting Group 社長 田口 伸氏

品質工学について、その歴史を通じて重要性と発展過程を述べられた。又従来の設計開発のやり方に対し技術活動の生産性を向上するためには「いかに一石百鳥できるか」、ブレーキシシステムを例にとって説明があり、「企業文化を変えていかないと品質工学は定着しない」と強調された。又事例「燃料ポンプのロバスト設

計」について丁寧に説明があり、アンケートからも「ロバスト設計に対する考え方が良くわかった」との声が多くあった。

■講演2 「品質工学活用のポイントと成功事例紹介」

コニカミノルタビジネステクノロジーズ(株)

マネージャー 芝野 広志氏

品質工学の狙いは、未然防止・機能限界の早期発見やソフトウェア開発におけるバグ発見の効率向上など10点ある。又ソフトを含むあらゆる技術を評価する「総合的評価法」であることや、「魔法の物差し」と別名するが「魔法の杖」ではない。即ち無から有は生まれないと強調された。「OA機器の温度上昇対策」では紙冷却装置を製作しパラメーター設計を実施し効果を上げた事例の他、養豚業の事例は興味深かった。アンケートからも「改善事例を取り入れてわかり易かった」との意見が多くあった。

講演会終了後も、活発な質疑が行われた。

服部 裕 (株)竹中工務店

第320回関西 事業所見学会 ルポ

CSRの視点から見た ビル建設の現場運営管理 前田建設工業(株)

4月26日(休)、大阪南港に建設中の前田建設工業(株)関西支社、大阪入国管理局作業所の見学会が「CSRの観点から見たビル建設の現場運営管理」のテーマで開催されました。定員30名に対し多数の申し込みがあり、お断りした方も出る程の盛況でした。

会社の概要、CSR経営の考え方等の説明に続いて当ビル建設の計画概要、工程表、工法、更に大幅な工期短縮等のお話があり、協力会社には安全衛生、お客様には品質、地域社会には環境の取り組みについて懇切丁寧な説明がなされました。その後、2班に分かれて作業所内を見学しました。現場は作業中にもかかわらず

整然としていましたが、「一作業一片付け」の徹底、作業者とのコミュニケーション、意見交換の場の設置等の説明で、現場の5Sの状態に納得した参加者も多かったものと思います。

また、建設現場が見えるように外柵に透明パネルを設置したり、騒音管理レベルを第三者が監視できるように騒音計を設置したり、花壇を設置したりと、地域への配慮、アカウンタビリティを重視していることが実感できました。ビルの見学では工事用のエレベーターと階段を利用し最上階まで上がり、各階毎の工事の進め方について説明をうかがいました。

質疑応答では、もっと工期短縮が出来たのではないか、等の積極的な意見も出るなど、大いに盛り上がり、無事見学会を終了しました。

森 誠一 (株)力ネ力

第325回本部 事業所見学会 ルポ

JFEスチール(株) 東日本製鉄所(千葉地区) 「最先端の素材産業」

2007年8月3日(金)、第325回事業所見学会がJFEスチール・東日本製鉄所で開催された。台風一過、猛暑での開催であったが34名と多くの参加者があった。

JFEスチール(株)は2003年に日本鋼管(株)と川崎製鉄(株)とが合併して発足したが、当千葉地区は旧川崎製鉄(株)の工場であった。現在、当社の製鉄生産量は世界第4位であるが、その技術力および設備は世界のトップクラスに位置している。

会社概況説明を受け、製鉄ビデオを見た後に、バスで構内を見学した。敷地はなんと820万㎡(東京ドームの176倍)もある。大きく分けて、工場は3つあり、我々は溶鉱炉のある「東工場」と熱間圧延工程のある「西工場」を見学させて戴いた。

「鉄は熱いうちに打て」のことわざの通りに、厚さ30センチほどの羊羹状の赤い銑鉄板が600メートルの一貫圧延工場、厚さ数センチの帯鋼に時速100メー

トルのスピードで加工される工程は、見学者を圧巻するものがあった。以前、同工場を見学したことがあるが、当時は溶鉱炉から取り出した真っ赤に燃え上がる銑鉄が作業員の足元を流れ、上半身が裸身の作業員が忙しく動き回っていた。また、鋼板の傷の検出は目視で行われ、多くの作業者が工程内で監視作業をしていたことを思い出す。現在は、従業員も当時の1/3の人員となり、しかも鋼板生産量は当時より数倍上がっていると説明があった。確かに、工場内にはほとんど人が見られなかった。また、品質の作り込みもチェックや検査に頼らずに、源流で確実に管理する体制が確立されている様子が伺えた。製鉄産業は二酸化炭素の排出量も多く、環境への取組みも大きな課題として、真剣に取り組んでいた。

「鉄は国家なり」といわれるが、バブル経済の崩壊後、日本の産業の勢いが弱くなったように感じたが、日本の基幹産業が世界トップに君臨して、力強く歩んでいる様子を目のあたりにして、暑さを忘れて帰路についた。

山崎 正彦 (元・コニカ(株))

2007年6月の入会者紹介

2007年6月12日の資格審査において、下記の通り正会員15名、準会員1名の入会が承認されました。

(正会員15名) ○福島 秀三(日本ヒューレットパッカー) ○長谷川 勝美(大同信号) ○古居 弘二(大阪府済生会千里病院) ○伊藤 幸(成城大学) ○浅沼 和志(長野県工科短期大学校) ○野中 公男(QMソリューションズ)

○伊藤 隆之(東光) ○大木 剛(東日本旅客鉄道) ○山本 國夫(カネカ) ○土屋 裕嗣(新日本製鐵) ○伊勢田 伸(伊藤忠メカトロニクス) ○高橋 義久(高橋海事ISO労務事務所) ○長谷部 了子(北信総合病院) ○岸本

昌明（大日本インキ化学工業）○藤沢
匡哉（東京理科大学）

（準会員1名）○高尾 幸生（東京理科大学）

正会員2950名
準会員95名
賛助会員179社206口
公共会員22口

2007年7月の入会者紹介

2007年7月17日の理事会において、
下記の通り正会員16名、賛助会員2社
の入会が承認されました。

（正会員16名）○坂本 治之（日本アイ・ビー・エム）○瓜生 敏郎（アイリック）○新家 達弥・大沼 邦彦（日立製作所）○梅原 大生（日本生活協同組合連合会）○寺本 繁（トヨタ自動車）○木下 智雄（日新火災海上保険）○鹿島 清仁（日野自動車）○橋本 進（日本規格協会）○茨木 陽介（TIS）○南澤 巖（サンデン）○浅井 誠（オムロン）○小橋 一志（関西電力）○土岐 大介（オークラ情報サービス）○佐藤 俊輔（日本規格総合研究所）○松浦 秀典（ダイハツ工業）

（賛助会員2社2口）○関東自動車工業
○キヤノン化成

正会員2951名
準会員88名
賛助会員181社208口
公共会員22口

第37年度会費請求のお知らせ

第37年度（2007年10月1日～
2008年9月30日）会費請求書を同封いたします。

郵便局自動引き落としを利用されている方には請求書を送付いたしておりません。10月25日に引き落としとなりますので、郵便口座の残高をご確認ください。

行事案内

●第85回研究発表会（関西）

日時：2007年9月21日(金)13:00～17:00
会場：大阪・中央電気倶楽部
5階513号室

定員：100名
参加費：会 員3,000円 非会員4,000円
準会員1,500円 一般学生2,000円
※当日払い

申込方法：8月送付の参加申込書にご記入の上、関西支部事務局までお申し込みください。

●第116回シンポジウム（本部）

テーマ：ICタグと情報伝達の現状と今後の動向

日時：2007年9月20日(木)10:00～17:00
会場：日本科学技術連盟
東高円寺ビル 2階講堂

定員：150名
参加費：会 員5,000円（締切後5,500円）
非会員7,000円（締切後7,500円）
準会員2,500円 一般学生3,500円

申込締切：2007年9月13日(木)

プログラム：

開催挨拶「情報ネットワークの現状」
大藤 正氏（玉川大学）

基調講演「ICタグの現状と今後の動向」
九野 伸氏（株日立製作所）

講演1「コムトラック・システム」
笠原時次氏（コマツ）

講演2「機械に組み込まれた情報活用」
大月孝宏氏（サンデン株）

パネルディスカッション（講演者 他）

申込方法：

ホームページからお申し込みできます。
<http://www.jsqc.org/q/news/events-list.html>

●第99回講演会（本部）

テーマ：間近に迫る内部統制報告制度
—その最新情報—

日時：2007年10月2日(火)13:00～16:45
会場：日本科学技術連盟
千駄ヶ谷本部 3号館2階講堂

講演1：「間近に迫る内部統制報告制度—その最新動向—」
町田祥弘氏（青山学院大学）

講演2：「品質管理の立場からみたJ-SOX法対応について（仮題）」
磯部孝征氏（元・日産自動車株）

定員：120名
参加費：会 員4,000円（締切後4,500円）
非会員6,000円（締切後6,500円）
準会員2,000円 一般学生3,000円

申込締切：2007年9月25日(火)

申込方法：

同封の参加申込書にご記入の上、本部事務局までお申し込みください。ホームページからも申し込みできます。

<http://www.jsqc.org/q/news/events-list.html>

●第37回年次大会・名古屋工業大学（本部）

日時：2007年10月26日(金) 27日(土)
26日(金)午後

13:45～7:00 事業所見学会

A：豊田合成株

B：株東海理化

18:00～20:00 年次大会懇親会
（名工大）

27日(土)

9:30～10:20 通常総会

10:20～10:35 各賞授与式

10:40～11:40 中期計画 報告

圓川隆夫氏

（JSQC会長・東京工業大学）

渡邊浩之氏

（JSQC副会長・トヨタ自動車株）

12:40～18:00 研究発表会

参加費：

見学会（26日）

会 員2,500円 非会員 3,500円

準会員1,500円 一般学生2,000円

懇親会（26日）

会 員・非会員 4,000円

準会員・一般学生2,000円

研究発表会（27日）

会 員4,000円（締切後4,500円）

非会員6,000円（締切後6,500円）

準会員2,000円 一般学生3,000円

申込締切：10月17日(水)

申込方法：

同封の参加申込書にご記入の上、本部事務局までお申し込みください。ホームページからも申し込みできます。

<http://www.jsqc.org/q/news/events-list.html>

行事申込先

JSQCホームページ：www.jsqc.org/

本部：TEL 03-5378-1506

FAX 03-5378-1507

E-mail：apply@jsqc.org

中部支部：TEL 052-221-8318

FAX 052-203-4806

E-mail：nagoya51@jsa.or.jp

関西支部：TEL 06-6341-4627

FAX 06-6341-4615

E-mail：kansai@jsqc.org

第37回通常総会開催

（社）日本品質管理学会第37回通常総会を右記のとおり開催いたします。

日時：平成19年10月27日(土) 9:30～10:20

場所：名古屋工業大学 23号館共1教室（愛知・名古屋）